

国語科

物語世界を楽しみ、学ぶ楽しさをつくりだす国語科の学習

—第2学年「お手紙」の実践を通して—

杉川千草

1 はじめに

学習指導要領によると、低学年における読むことの指導では、「楽しんで読書しようとする態度を育てる」ことが求められている。昨年度から持ち上がった2年生の子どもたちは、毎週の図書の時間を楽しみにし、保護者や教師の読み語りを楽しそうに聞き入っている。一方で、国語科での読みの学習においては、作品を場面ごとに細分化したり与えられた文章を分析的に読んだりすることなどに、必ずしも読むことを楽しんでいない姿が見受けられるのが実状である。

昨年度は、読むことの学習と実生活の中での読書をつなげるために、絵本を活用して作品との出会わせ方を工夫する実践に取り組んだ。その結果、物語全体のおもしろさを味わったり、物語の続きを想像することを楽しんだりする姿が見られた。

そこで、本年度は、昨年度に引き続き作品との出会わせ方を工夫すると共に、物語を読むことを書く活動に発展させることによって、物語世界を楽しませ、学ぶ楽しさをつくりだしたいと考えた。

2 研究の構想

(1) 学ぶ楽しさをつくりだす

国語科は、ことばについてことばを通して学ぶ教科である。子どもたちは、文字や語彙を習得することによって、新たな事柄やことばのより深い意味を理解するとともに、表現力を豊かにし、認識を広げることができるようになる。

ことばのおもしろさとは、単にことば遊び的なおもしろさだけではなく、一つひとつのことばに

込められた意味の奥深さや洗練された表現の豊かさであるにとらえる。そして、学ぶ楽しさとはことばを吟味する活動を通してことばのおもしろさに気づき理解し、広げ深め、追求する中で感じられるものであると考える。

また、読むことの学習は話すこと・聞くことや書くことという表現活動と切り離すことができない。表現を伴う学び合いの場で、他の学習者と読みを交流させながら、自分の読みを確立させることが、思考力・判断力・表現力を育てることにもつながると考える。作品を読んだり学習者同士で交流したりする中で、自分のもっている認識との違いに驚きや発見を見出し、そこにことばのおもしろさを感じることができる。さらに、自分の認識が変容したり確信をもったりすることによって、より深い内容を理解し学ぶ楽しさを感じることができると思う。

(2) 物語世界を楽しむために

物語世界を楽しむために、次のことに留意した単元構成を行う。

①作品との出会わせ方を工夫する

子どもたちが物語世界を楽しむためには、ことばへの興味・関心を引き出し、課題意識や目的意識をもつことが大切である。単元のはじめに、学習に対する興味や関心を高め、疑問や課題意識をもたせることによって、学習意欲を喚起する。そこで、教材文を提示する前に、挿絵や題名からイメージを広げたり内容を予想したりすることによって、子どもたちの興味・関心を引き出し読みの課題意識をもたせ、学習に主体的に取り組めるようにする。

②作品世界を広げる

教科書の教材文は限られた紙面であるため、原作となる絵本の挿絵が省かれていたり、ページ割が変えてあったりする場合がままある。そこで、絵本の挿絵を活用することによって、登場人物の気持ちを想像したり、作者のことばの使い方の工夫に気付いたりしやすくさせる。

また、作品を丸ごと楽しむことが、本来の読書の姿である。そこで、場面ごとに学習する場合も、常に物語全体が意識できるようにする。さらに、シリーズや同一作者の作品を読ませることによって、場面設定を把握させたり登場人物に親しみをもたせたりすることで、物語をより立体的に楽しませるようにする。

③読むことを書くことに生かす

子どもたちは、与えられた読みではなく、自ら考え自ら表現することに楽しさを感じる。そこで、読むことの学習の発展として、それまで読み取ってきたことを生かして、自分で新たな物語を創作する活動を位置付ける。物語の創作という目的のために、内容の読み取りだけでなく、物語の構成や工夫など、作者の視点からの読み取りも必要になってくる。また、物語の創作にあたっては、再度、書くために物語を読み返すことも必要になってくるだろう。再読することによって、物語の新たなおもしろさに気付くことも期待できる。

これらのことが物語世界を楽しみ、学ぶ楽しさをつくりだすことにつながると考える。

3 実践

(1) 単元名

心のうごきを読みとろう（学校図書二下）
「お手紙」（アーノルド＝ローベル 作・絵
三木卓 訳）

(2) 授業の構想

①単元について

親友の悲しみを自分の悲しみとして受けとめ、一通のお手紙を通して二人の心のつながりが一層深まっていく様子が描かれた物語である。今まで

一度もお手紙をもらったことがないと嘆くがまくんを喜ばせようと奔走するかえるくんのやさしさが物語全体を貫いている。物語は二人が不幸せな気持ちから幸せな気持ちになるまでの推移が中心で、文章は主に会話文から構成されており、それぞれの人柄や心情が表れている。「お手紙」が収められている「がまくんとかえるくん」の絵本は、どの物語も二人の心のつながりがユーモラスに描かれており、二人の人物像や関係性がよくわかるものになっている。そこで、絵本への読み広げを通して、がまくんとかえるくんの心のつながりを読み取らせると共に、物語づくりを通して、ほのぼのとした物語世界のおもしろさを楽しませるようにした。

指導にあたっては、「お手紙」の学習では、挿絵を活用して物語の内容を想像させたり読みの課題意識をもたせたりした。場面ごとの読みでは、会話文をもとに二人の気持ちを想像させ、登場人物に寄り添いながら二人の心のつながりを読み取ると共に、読者の立場から物語のほのぼのとしたおもしろさに気付かせるようにした。単元のまとめとして物語づくりに取り組ませることによって、読むことを楽しませるだけでなく、課題解決に向けて粘り強く取り組めるように単元全体を見通しながら学習を進めていくようにした。また、「お手紙」の学習と並行して「がまくんとかえるくん」シリーズの他の物語も読むことによって、二人の心のつながりが常に変わらないものであることに気付かせ、物語世界をより一層楽しませるようにした。

②目標

- 読書に関心を持ち、物語を楽しんで読もうとすることができるようにする。
- 登場人物の行動や会話に注目して、登場人物の気持ちを想像しながら読み、心のつながりをとらえることができるようにする。
- 物語に用いられている文体や表現の特徴に気付き、言葉のおもしろさを感じることができるようにする。

③学習計画（全14時間）

- 第1次 「がまくんとかえるくん」の物語を読もう 2時間
- 第2次 「お手紙」を読もう 8時間
- 第3次 「がまくんとかえるくん」のオリジナル物語をつくろう 4時間

(3) 授業の実際（Y児の記録を中心に）

〈第1次 「がまくんとかえるくん」の物語を読もう〉

①第1時 「はるがきた」を読もう

教科書の本文を読む前に、がまくんとかえるくんが登場する物語の世界に触れさせたいと考えた。そこで、まず「ふたりはともだち」（文化出版局）に収録されている「はるがきた」という題名を提示し、どんなお話だと思うか想像させたところ、次のような意見が出された。

- ・うさぎが桜を見つけてお花見をするお話。
- ・春に生まれた男の子と女の子が花を見つけていっしょにあそぶお話。
- ・冬眠からさめたくまが、さくらがさくのを待っているお話。

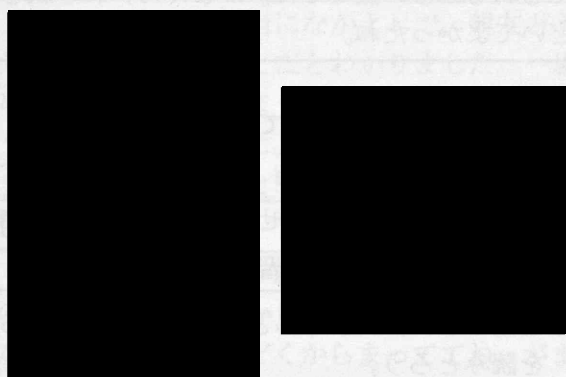


図1 「はるがきた」の挿絵

その後、絵本の最初と最後の挿絵（図1）を見せて、がまくんとかえるくんが登場する「はるがきた」はどんな物語だと思うか想像させたところ、Y児は次のような話を書いた。

朝早く、かえるくんはがまくんの家に行き、いっしょに春を待ちに行き、二人で楽しく家の中で過ごしているうちに春になったお話。春が来たら、いっしょに川へ行って水あそびをしたり、いっしょにおよいだりしていつもゆかいな一日をすごすお話。

その後、絵本を分冊にした「はるがきた」の本文を渡すと、「どんな物語だろう。」と一生懸命読もうとする姿が見られた（図2）。また、がまくんを早く起こしたいあまりにカレンダーを破って5月にしてしまうかえるくんの行動に、子どもたちは思わず吹き出していた。



図2 「はるがきた」を読む

その後、自分の想像した話と比べながら感想を書かせた。Y児の感想は、次のとおりである。

さい後にはがまくんがおきてよかったよ。わたしがそうぞうしたお話とちがって、この話はがまくんがまだ冬みんしていたのでおもしろかったです。わたしは、よの中がたぶん草花でいっぱい少しおさん歩をしたんだと思います。この話のしゅるいをぜんぶ読んでみたいです。

②第2時 「なくしたボタン」を読もう

本時は、前時と同じように「ふたりはともだち」の中の「なくしたボタン」の題名を提示し、絵本の最初と最後の挿絵（図3）を見せて、どんな物語だと思うかを想像して書かせた。

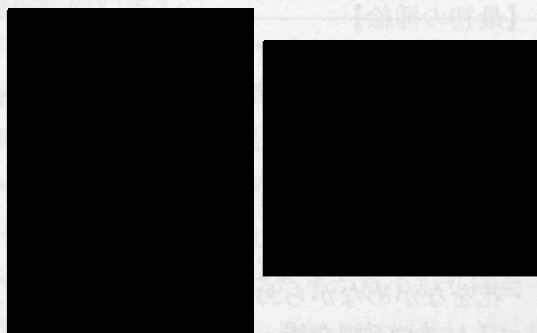


図3 「なくしたボタン」の挿絵

「はるがきた」のつづきで、よの中がどんなふうになっているかたんけんしている時、がまくんのふくのボタンがなくなって歩いていると、かえるくんが「ぼくのふくにはボタンがないから、ふくをかえっこしてあげるよ。」と言いました。けれど、がまくんは「もういいよ、ないから。」と言って、ふくをぬぎすててしまったところで、かえるくんが「あっ、あそこにあった。」とゆびさして言いました。

子どもたちの中には、Y児のように「はるがきた」に続くお話として考えている者もいた。本文を読み聞かせた後、自分の想像した話と比べながら感想を書かせて、授業を終えた。

わたしのがまくんは、なかったらさがし回るんだけど、すぐ目につくところにおちていたりおいていたりするところがにえています。かえるくん、上ぎがもらえてよかったね。がまくんの気もちがたっぷりつまった上ぎだよ。大切につかってあげてね。いつまでもがまくんとなかよくな。

〈第2次 「お手紙」を読もう〉

①第1時 「お手紙」を読もう

第1時は、「お手紙」の題名を提示し、最初と最後の挿絵（図4）を比べてわかることをあげさせた。

図4 「お手紙」の挿絵

【最初の挿絵】

- ・がまくんがしょんぼりしている。
- ・がまくんは、きっとどうでもいいことで悲しんでいる。
- ・かえるくんはがまくんをなぐさめている。

【最後の挿絵】

- ・二人ともにこにこして楽しそう。
- ・花をながめながらおしゃべりをしている。
- ・二人でお手紙を待っている。

Y児は、2枚の挿絵から次のような話を想像して書いた。

かえるくんはがまくんの家にあそびに行きました。けれど、がまくんはベランダでないです。かえるくんが「どうしたの。」ときいたら、「ぼく、おばあちゃんに手紙出したのにおへんじが来ないんだ。」と言いました。「じゃあ、ぼくといっしょにお話ししながらまたない。」「うん、そうする。」「お手紙、早く来てほしいね。」まっていたら、ちゃんと手紙がとどきました。

その後、教科書の本文を読み聞かせ、自分の想像した話と比べたり、これまでに読んだ「はるがきた」や「なくしたボタン」と関連付けたりしながら感想を書かせた。（下線部）

わたしは、この話を知っていたんだけど、かたつむりが四日もかかってもまつところが、よっぽどお手紙がほしいんだなと思いました。がまくんとかえるくんの話は、さい後にいいことがおきる話だとわかりました。この話はとってもおもしろい話でした。がまくん、お手紙とどいてよかったね。

②第2時 学習計画を立てよう

次の時間は、「お手紙」にかかわってみんなで学習したいことをあげさせた。それらを整理して、次のような単元全体の学習課題を決めた。

- 場面ごとに、がまくんとかえるくんの気もちを読みとろう。
- 二人はなぜともしあわせな気もちになったのだろう。
- かえるくんはなぜかたつむりにお手紙をたのんだのだろう。
- がまくんとかえるくんの新しいお話を自分たちでつくろう。

そして、場面ごとの読み取りの後、「がまくんとかえるくんが登場するオリジナルの物語をつくる」という大まかな学習計画を立てた。

また、「お手紙」の学習と並行して、「ふたりはともだち」「ふたりはいっしょ」「ふたりはいつも」「ふたりはきょうも」（文化出版局）に収められている物語を分冊にして教室に置き、休憩

時間などにいつでも読めるようにして、感想を書き留めさせておくようにした。

③第3～7時 場面ごとに読もう

場面ごとの読みでは、「がまくんとかえるくんの気持ちを読みとろう。」を学習課題として各場面の内容を読み取っていった。子どもたちは、授業のはじめにそれぞれ自分の考えをもち、それらを交流した後に学んだことをまとめるという流れで学習を進めた。また、単元の最後に物語の創作をすることを意識させ、作者の視点からの読みも随所に取り入れるようにした。以下は、Y児の授業前、授業後の読みの記録である。下線部のように、読みの広がりや深まりが見られる。

【1場面】

かえるくんは、がまくんが生まれてから一どもお手紙をもらったことがないと聞いて、それはとってもかわいそうと思ったんだと思います。それで、おちこんでがっかりしているがまくんといっしょの気持ちになったんだと思います。親友だから、同じ気持ちになったんだと思います。

親友というのは本当になかよしで、親友どうしなかよくできることだとわかりました。一場めんだけ読んで、がまくんはとってもかわいそうな人だと思いました。かえるくんは、人のそうだんにのれる人だと思いました。

【2場面】

がまくんに早くお手紙をわたそう。がまくんのはじめての手紙だから、きれいな字で書こう。がまくん、すぐにとどくからまってね。がまくん、ぼくのお手紙うけとってね。がまくん、大切にしていね。

今日は、作しゃさんのひみつがわかりました。読んでいる人におもしろさを見つけてもらって、楽しんでもらおうとしたんだと思います。かえるくんはがまくんに手紙を早くとどけて、がまくんに「やったあ、ぼくに手紙をくれる人がいた。やっぱりきみは、ぼくの親友だね。」と言ってもらいたいんだと思います。

【3場面】

がまくんは、お手紙がもらえなくてぷんぷんおこっているんだと思います。かえるくんは、「ぼくが手紙を書いたのに、どうしてわかってくれないんだろう。せっかくがんばったのに。」

と思っているんだと思います。かたつむり早く来て。かたつむりは「がんばろう。もっと早く。」と思っているんだと思います。

今日わかったことは、がまくんは今とってもおこっているということです。わけは、お手紙がぜんぜん来ないからです。かえるくんも同じ気持ちだと思います。なぜかという、お手紙をかたつむりがもってこないからです。二人は同じ気持ちでも、いみがちがうということがわかりました。がまくんは、おひるねがすきなんだということがわかりました。

【4場面】

かえるくんは、「ついに言ってしまった。」という気持ちになったんだと思います。かえるくんは、それでいいと思っているんだと思います。がまくんは、人生ではじめての手紙だから、とってもとってもしあわせな気持ちでとってもとってもうれしい気持ちだと思います。

かえるくんは、手紙を書いたことを自分の口からつたえたかったんだと思います。がまくんは、本ものの手紙を楽しみにしているんだと思います。がまくん、かえるくんにあんまりめいわくをかけちゃだめだよ。

【5場面】

がまくんは、手紙がまちどおしい気持ちなんだと思います。「かえるくんはやさしいな。」と思っているんだと思います。かえるくんはがまくんに「とてもいい手紙だ。」と言ってもらえたのでしあわせな気持ちなんだと思います。自分の手紙を気に入ってもらえてうれしい。

たとえ何があっても、親友だからたすけてあげたりそうだんにのってあげたりするんだとわかりました。がまくんは、大ジャンプしてよこんだと思いました。どうしてさい後に二人ともしあわせな気持ちになったかということ、かえるくんは一生けんめいに手紙を書いてくれたということが、四場めんではがまくんにもわかったからだと思います。

④第8時 「お手紙」のまとめをしよう

本時は、子どもたちが課題としてあげていた「かえるくんはなぜかたつむりにお手紙をたのんだのだろう。」について学習した。

まず、かえるくんは、たまたまかたつむりに会ったから手紙を託したのか、それともわざわざかたつむりに頼んだのか各自で考えさせた。

かえるくんは、たまたま会った人にたのもうと思ったんだと思います。それで、かたつむりに会ったからだと思います。早さはどのくらいでもよくて、がまくんにお手紙がとどいたらそれでよかったんだと思います。だけど、まだどっかあやふやです。わざわざ行ったからかもしれません。わざわざ行ったら、がまくんは四日もまたないといけないことがわからないからびっくりすると思います。

その他、「たまたまかたつむりに会った」という考えの子どもからは、

- ・かえるくんはいそいでいたので、たまたま出会ったかたつむりに頼んだ。
- ・がまくんに手紙がとどけばいいので、だれでもよかった。
- ・もともとかたつむりと知り合いだった。

などの意見が出された。

「わざわざかたつむりに頼んだ」という考えの子どもからは、

- ・かたつむりは体が小さいので、がまくんに見つからない。
- ・二人でゆっくり話すためには、時間がかかる方がいい。
- ・がまくんへの楽しみをふやすため。
- ・読んでいる人を楽しませるため。

などの意見が出された。

そこで、お手紙ががまくんにすぐに届いてしまっていたら物語がどんな展開になっていたかを想像させた。子どもたちからは、

- ・二人でゆっくりお話しすることができない。
- ・物語があっという間に終わってしまう。
- ・この物語のおもしろみがなくなる。

などの意見が出された。

そこで、手紙をかたつむりにことづけたおかげで、二人は四日間もしあわせな気持ちでいられたことを確認し、それが作者の工夫であることに気付かせた。

しゅやくでもないお手紙をわたすやく目の人をアーノルド＝ローベルさんはよく考えているなと思いました。そして、アーノルド＝ローベルさんは、どの話にもおもしろいことを

入れて、読む人に楽しんでもらおうと思ったんだと思います。アーノルド＝ローベルさんはすごいなと思いました。よく考えているんだとわかりました。アーノルド＝ローベルさん、この話、おもしろかったです。

〈第3次 「がまくんとかえるくん」のオリジナル物語をつくろう〉

①第1時 オリジナル物語の構想を考えよう

「はるがきた」「なくしたボタン」「お手紙」の学習や、がまくんとかえるくんシリーズの物語の内容を想起させながら、「お手紙」を含めた「がまくんとかえるくん」の物語の特徴について整理した(図5)。

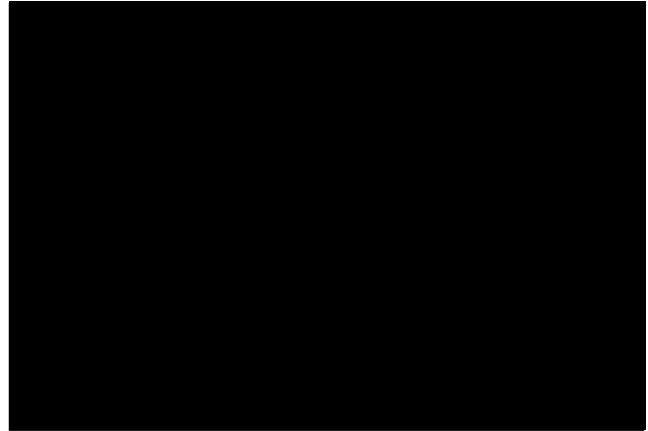


図5 第3次第1時の板書

そして、次の3点を生かして、オリジナル物語の創作に取り組むことにした。

- 主な登場人物は、がまくんとかえるくん(それぞれの人物像を大切にする。)
- 二人は親友
- 物語の最後はハッピーエンド

実際の創作にあたっては、事前に時や場所、登場人物を決めて、簡単なあらすじを考えさせた。Y児は、次のようなあらすじを考えた。

がまくんとかえるくんが野原でロボットであそんでいた時に、鳥がとんできて、ロボットがとばされて、二人で作ったお話。

その後、段落ごとに大まかな内容を考え、物語の特徴を生かしながら、創作に取り組みさせた(図6)。Y児は、次のような物語を書き上げた。

「大切なロボット」 Y児作

がまくんとかえるくんは、野原でロボットであそんでいました。

「このロボットはせかい—かつこいいぞ。」
がまくんが言いました。

「うん、ぼくもそう思うよ。」

かえるくんも言いました。

その時、大きな鳥がとんできました。それでロボットは、遠くへとばされてしまいました。

「ああ、ぼくたちのロボットが……。」

がまくんが言いました。

「かつこよかったのにな。」

かえるくんが言いました。

それから、二人はかえるくんの家に帰りました。

かえるくんが言いました。

「そうだ。ぼくたちがロボットを作ればいいよ。」

「そうこなくっちゃ。」

がまくんが言いました。二人はロボットを作りはじめました。切ったりはったりして、ようやくでき上がりました。

二人ともこう言いました。

「やったあ、ついにかんせいしたぞ。やった、やった。」

ロボットは、とっても上手にし上がりました。

二人は、野原にもう一回行ってみました。そうですね、自分たちで作ったロボットであそぶのです。

それから二人は、野原を行ったり来たりして、ロボットで楽しくあそびました。

次の時間から、いよいよオリジナル物語を書き始めた。文章が完成したら、挿絵を描き表紙をつけて、絵本の形に仕上げた。その後は教室に置いて、休憩時間などに自由に読み合い、お互いの感想を交流し合うようにしている（図7）。

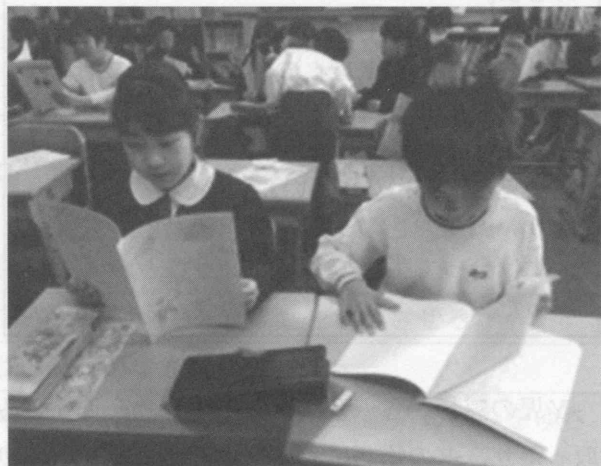


図7 オリジナル物語を楽しむ

4 考察

(1) 作品との出会わせ方を工夫する

今回の実践では、教科書の本文を読む前に、挿絵と題名から内容を想像させ、本文と比べさせるようにした（第1次、第2次第1時）。

子どもたちにとって、自由に想像することはとても楽しいことである。挿絵や題名からイメージを広げたり内容を予想したりすることは、子どもたちの興味・関心を引き出すと共に、読みの構えをつくることにつながった。また、登場人物の表情など挿絵の細部に着目し、その根拠を本文で確かめながら読みを進めることができた。

Y児も、自分の予想と本文との相違点を見つけたり、「この話のしゅるいをぜんぶ読んでみたいです。」と記述したりするなど、これからの学習に意欲をもったことがうかがえる。

(2) 作品世界を広げる

今回の実践では、教科書の本文の学習と並行して、同じ作者のシリーズを読ませるようにした。

Y児は、20作品全部を読破し、登場人物の人物像や、シリーズ全体に共通する内容などを読み取って次のような感想を書いていた。



図6 物語の構想を考える

②第2時～第4時 オリジナル物語をつくろう

【はやくめをだせ】

がまくんはおっちょこちょいだけど、やさしいところもあるね。

【がまくんのゆめ】

わたしにもがまくんと同じようなところがあるよ。

【そこのかどまで】

「なくしたボタン」のお話みたいに、春はすぐそこにあったね。

【ひとりきり】

かえるくん、やさしいね。「親友」ってやっぱりいいね。このシリーズを読んで、二人でたすけ合って生きているということがよくわかったよ。

Y児の感想から、登場人物の隠れた一面を読み取ったり、どの物語にも共通する点を見出したりするなど、作品世界の読みを豊かにしていっていることがわかる。また、登場人物に話しかけたり自分と重ねて読んだりするなど、登場人物に親しみを覚えていることも感じられ、それらが授業での読みにも現れている。

他の子どもたちからも、授業中に「〇〇の話と同じように……」という発言や記述が見られた。同じシリーズを重ね読みすることによって、それぞれの物語を関連付けて自分の読みの根拠とすると共に、二人の登場人物の人物像や関係性、作者の物語づくりの工夫などに気付くことができていたことがうかがえる。また、子どもたちは、がまくんやかえるくんの醸し出すほのぼのとした雰囲気が大変気に入ったようで、二人があたかもクラスの一員であるかのような親近感をもって、学習に臨んでいる子どもも見られた。

(3) 読むことを書くことに生かす

今回の実践では、読むことの学習の発展として、物語の創作を位置付けた(第3次)。そのため、場面ごとの読み取りの際にも、作者の工夫を意識した発言や記述が多く見られた。

また、一人でいくつも物語の案を考えるなど、創作に意欲的に取り組んでいる様子が見られた。さらに、同じシリーズの物語を何度も読み返している姿も見られた。

事後アンケートによると、32名中30名が「オリジナル物語づくりが楽しかった。」と答えている。絵本づくりは、清書をしたり挿絵を描いたりとかかなり時間のかかる作業だったが、どの子どもも粘り強くがんばり、中には冬休みいっぱいをかけて31ページもの大作を書き上げた子どももいた。内容についても、三つの特徴を生かして、会話を盛り込みながらそれぞれのオリジナル物語を仕上げるができていた。Y児の作品を読んだ他の子どもたちから「がまくんとかえるくんがロボットを作ったところがすごいね。」「『そうこなくっちゃ。』というセリフがおもしろいね。」などの感想が見られ、お互いの物語を読み合うことを楽しんでいる様子が見られた。しかし、2名は「文章を書くことが難しかった。」「字や挿絵が上手にかけなかった。」ということを見ていたので、読むことと書くことをつなぐ手立てをもっと細やかにする必要があった。

さらに、読むことの学習が書くことにどのように反映されたか、書くことが今後の読むことにどのように生かされていくかを明らかにしていくことが求められる。

5 おわりに

今回の実践では、単元構成を工夫することによって、物語世界を楽しみ学ぶ楽しさをつくりだすきっかけとすることができた。学習後、友だちのつくった絵本を手にとって読んだり、図書室で同じ作者の本を探し出して借りて帰ったりするなど、読書を楽しんでいる姿が見られた。今後も、実生活につながる読みの授業をつくっていきたい。

<参考文献>

- 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 国語編」, p. 38, 2008, 東洋館出版社.
- 文部科学省：「初等教育資料No.914」, pp. 62-71, 2014, 東洋館出版社.
- 五味太郎：『絵本をよんでみる』, pp. 135-172, 2006, 平凡社.